

上野の杜の 波瀾 万丈

第十六回

作品展示施設の昔

吉田千鶴子

平成十一年に大学美術館が開館するまで、美校・藝大の校内で美術作品を展示することは可能だったのだろうか？

校友会倶楽部

およそ美術の学校であるからには、展示施設は不可欠である。しかし、美校開校直後の明治二三（一八九〇）年の頃は、一二、八五四坪強の敷地に東京教育博物館のお古の建物（教場六一七坪強、事務室七〇坪強、諸建物計二〇〇坪強と新築の金工・漆工場（一八四坪）、鋳物場（五六坪）、同仕上場（七〇坪）があるのみだった。年とともに教官や生徒、卒業生の制作活動が活発化し、展示施設は是非とも必要になった。しかし、僅少の学校予算では如何ともしがたい。そのためもあって急遽作られたのが校友会倶楽部。校地の南東隅、今、総合工房棟が建っているあたりにあって、総檜造八八坪強の建物だったという。かろうじて残っていた写真と簡略な平面図を上野勝久教授にご覧いただいたところ、平屋建、寄棟造、四周下屋庇、棧瓦葺という構造だという。もとは岡倉天心やビゲロウ、フェノロサらが深

く帰依した三井寺法明院住職の桜井敬徳僧都のために、富豪のビゲロウが小石川原町に「円密道場」を建てて寄進しようとし、その骨組みができるかできないかの時、敬徳が遷化明治三二年（一九一九）年、また、ビゲロウも帰国して計画が宙に浮いてしまったため、天心の先輩官僚で美校商議委員でもあった高嶺秀夫が仲介の労をとって明治三五年の夏に美校が譲り受け、移築・完成させたものだった。

この建物は校友会の会合や展覧会によく使われたらしい。明治二、三〇年代の東京にはまだ作品展示に相応しい施設はなく、比較的多数展示できる施設としては上野公園竹の台、つまり今の噴水と都美術館の中間あたりにあった旧博覧会五号館（のち竹の台陳列館と改称）と日本美術協会の陳列場があったくらいで、小規模の展示には附近の料亭などが使われた。一般の美術団体が最もよく使った旧博覧会五号館は第三回内国勸業博覧会のときに作られた建物の一つを管轄者の帝国博物館が展示施設として残したもので、いわば長い掘っ立て小屋のようなものだったが、大正一五

（一九二六）年に東京府美術館（今の都美術館）ができるまでは、皆やむなくそこを使った。

そのように侘しい状況であったから、校友会倶楽部の存在価値は大きく、歴史的意義のある展覧会も開かれた。たとえば、まず明治二五年秋の日本青年絵画協会第一回共進会の開催である。この会は諸画塾の若手門生たちが天心校長を会頭に載いて結成したもので、四年後の二九年春に美校絵画科卒業生下村観山、横山大観、菱田春草ほかの面々と連携して日本絵画協会（天心副会頭）に発展、展覧会を重ねて日本画革新派としての鮮やかな足跡を記し、それが院展と文展日本画部門へと繋がって行く。また、日本近代彫刻史上最初の革新団体として歴史に登場する青年彫塑会（天心会長）が明治三〇年秋に旗揚げの展覧会を開いたのもここである。美校彫刻科卒業生たちの意欲作と教官の応援出品作四〇余点が展示され、彫刻革新の気運を世に告げた。同三四年には同会の後身に当たる彫塑会が第二回展をここで開くに当たって、竹の台方面から来て美校正門（今の正木記念館と黒田記念

館の間あたりにあった）を通らず直接倶楽部へ行けるようにと、動物園寄りの校地境界土手を削って木造黒漆塗りの門を作り、美校に寄附した。日本橋麒麟像の作者として名を残す渡辺長男が寄附者代表となっている。なお、美校の卒業制作や平常制作、特別企画展の展示には教室が使われた。

この歴史的意義のある倶楽部が芸大大改築計画のため昭和三〇年代半ばに取り壊されてしまったのは残念だが、考えてみれば大正三年の校舎全面改築・開校満二五年記念式典の際の卒業生賛助会の醸金による大幅な増改築（平屋建二七坪強、二階建二二坪強増築）や昭和七年和田英作校長時代の大修理があっただけでなく、敗戦直後には家屋を失った教官や生徒、卒業生が住み着き、荒れ放題となっていたから、取り壊さざるを得ない状態だったのだろう。

美術館を美校内に建設？



1



2



3



4

1. 美校校友会倶楽部 取り壊し寸前に撮影されたものらしい。
2. 東京府美術館
3. 美校文庫閲覧室
展示コーナーが設けられ芳崖作「不動明王」が展示されている。
4. 美校陳列館 完成直後に撮影されたものらしい。

美術界待望の東京府美術館が完成したのは大正一五年五月である。それは、美術界からの度重なる美術館建設要求に対して予算がない旨の回答を繰り返していた東京府知事に、突如福岡県若松市の篤志家佐藤慶太郎が建設費百万円を寄附したことにより建設計画が始まったのだが、最初は府が美校敷地の一部を借りて建てる予定だった。本学に残る「東京府美術館建設敷地関係書類」によると、大正十二年七月に宇佐美勝夫東京府知事が美校長正木直彦に校地借用願いを提出している。それを見ると、美校敷地の東南二〇〇七坪強に屏風坂通り向きに三つの階段エントランスをもつ一二六坪の建物を作る計画だったことが分かる。それを正木は美校の展示に便宜を図るなど種々の条件付きで承諾し、文相も許可を下した。しかし、美術館が出来る」と美校は敷地を大幅に狭められることになり、美術館としては面積が足りないなど、最

文庫・陳列館・正木記念館

初からこの計画には無理があったらしく、大正一三年一月の正木宛府知事文書では早くも計画を中止し、上野公園内二本杉原の土地四〇〇〇坪(今、都美術館が建っている土地)を無償借用する許可が下りたという告知がなされている。かくて府美術館は美校建築科教授岡田信一郎設計監督、大林組の工事請負により八四万円を費やして建設され(のち増築、一九七五年全面改築)、美校の隣りに威風堂々たる姿を現わしたのであった。この建物は後述の美校陳列館、隣りの黒田記念館とともに岡田信一郎の美術館三部作と称されたものだ。

が早くから唱えていたことだが、彼の失脚後、美校当局はその遺志を受け継いで、明治三三年から「東京美術学校年報」において陳列場ないし陳列館新設の要請を始めた。要請文のうち特に同三九年のもの(「東京芸術大学百年史」東京美術学校篇第二卷三三二頁所載)は、翌年開始と決まった校舎大改築の一環として参考標本展示と生徒成績品展示のための陳列館を新設して欲しいという、熱誠溢れる文であって、一読をお勧めしたい。しかし、その後、旧帝国図書館の敷地・建物の移管を受けてできた文庫(今の赤レンガ一、二号館)の一部に参考標本を少々展示できるようにはなったものの、陳列館新設要請は一向に認可されず、三〇年近く涙ぐましい要請を続けた筈句、漸く四万円余りの小額予算が下りて、昭和四(一九二九)年三月に今の陳列館が完成した。建設の際、正木直彦は文部省建築課の建築技

能に信を置かず、美校が直接建築に当たる旨文部省に申し入れ、設計は前出の岡田信一郎が担当して展示向きの無窓壁・天窓採光構造、鉄筋コンクリート造二階建、外壁スクラッチタイル貼りの建物(建坪六五坪)が作られたのであった。開館から半年ばかりたった頃、正木は大英博物館東洋部長ローレンス・ビニヨン夫妻やドイツ大使夫妻、サムスン夫妻を陳列館の古物展示と文庫の絵画展示に案内し、また、李王殿下を陳列館の楽浪出土品展示に案内したことなどを日記に記している。長年の努力の結実であるこの建物に賓客を案内できることを正木は誇りに思ったことだろう。なお、昭和一〇年には正木記念館が完成、その一階が展示室となり、大学昇格後の同四一年に芸術資料館が完成して展示場(兼通路)が設けられ、平成十一年に至って一躍大学美術館の開館となる。その間の経緯はまたいずれ適任者が紹介してくれるだろう。

(藝大総合芸術アーカイブセンター特別研究員
・美術学部教育資料編纂室)